

八	寛政	二	三	四	五
十九人	五月廿日神代正語成 <small>後</small> 年 刺 五月遷幸成をのつと長 次を詠ふ 後年刺	廿八人	廿七人	廿七人	廿七人
五十九歳		六十歳	六十二歳	六十三歳	六十四歳

七	六
二十人	四十人
六十六歳	六十五歳

笏子の請申より三月三日辰五
の名古屋もものしり

八月自ら像をうつし画きて
て書添りし其款師木島の倭
心を人とも朝日より山花
○土月都よりて世言新造の丹
裡は遷幸成所をほひをとり

笏子の請より三月三日辰五
て都よりより其ほと浪波
とのして四月十日京よりて序
るさよ近に美濃へまより又名
古屋(れもむきまを)より
まより終ひて三十日辰五
より終ふ

紀伊殿は召さきて十月
十日に出立て若山より
さよ御前より大被詞
古今集序等を進講し
又詠歌大概を本文にして
歌道を説き聞え奉りせ
り此度奥醫師の列は
召加へらるる俸を賜り
又御紋の服は種々の禄を
一は賜りよりて因土月廿
三日罷まて帰るに難儀を
経て都よりよりて土月廿
三日罷まて帰るに難儀を
歌わむとてとてとてとて
のあやのしけを此大
平主を
しり

四月新古今集美濃家曇同
折添成 六年家曇刺
九年折添成

玉殿既成吟詩刺後年
論を著 成吟詩刺後年
○古事記中巻の傳成

正月子日より玉勝回を書始
り 三巻六年より刺又三巻九年
刺半後六巻刺成

紀行
○結ひ拾ふ枕の草葉成
○出雲國造神壽詞後釋成
八年刺

紀行
紀見の巻を成
此度箱掛大平主紀行
名所の演義成

二月字を中衛と改より

大被詞後釋成 寛政八
年刺

八	天祖都城辨辨既成 <small>今年</small> ○此頃源氏物語玉小櫛成 <small>後年</small>	廿二人	六十七歳
九	古今集遠鏡既成 <small>今年</small> 古事記下巻の傳成 平後文政五年に至り 全部刻成紀伊殿賞た よひて御之川より其 題号を書て大平主よ 賜ひけらるを奉賜して 巻の首よ載せ	十六人	六十八歳
十	○七月家譜修撰成 ○十月初山踏成 <small>十二年</small> ○鈴屋の文集歌集を 書調 <small>多し</small> 平後刻	廿八人	六十九歳
十一	二月吉野百首詠成 ○古訓古事記成 平後刻	廿三人	七十歳

十二	○鈴屋翁年譜 ○本末の歌 ○言語活用抄稿 <small>人田中</small> ○尾張連物部連系圖既成稿	廿四人	七十一歳
----	---	-----	------

今年伊勢國飯高郡山室の妙樂寺の山に建て墓所を建て標の石を建置たすふその時とみみんと秋山むろよ十年のまのやどりめて凡よきれぬ花をこそ見え

歷朝詔詞解既成今年
○神代卷警華山蔭既成今年
○地名字音轉用例既成今年
○疑齋辨既成
○真曆考不審辨既成
○臣道既成此書或人の君事多し
○五部書説辨加評此書
○本末の歌
○言語活用抄稿人田中
○尾張連物部連系圖既成稿

享和

人々の請申せるにやうりて
四月某日旅立て都より
四條烏丸の東に寓し
まひぬ此時大人の許は
いひてものささびすも
かゝ多うり諸國よりき
つてありあひさもあ
まうり此ほどやむごな
き御ありりよそ中山大
納言忠尹卿の御作よなび
いひ召されて延喜式の祝
詞を進講せらるる御息草

伊勢二宮さたけ竹の辨既
成 今年八月朔
○後撰集言葉の束緒成
今年秋とこは各々の後
ひて撰本よせんとして
三枚書きして卒すといぬ
翌年刻

廿八	没後	三人	弟子四
			十餘國
			之人合
			四百九
			十人

七十二歳

相中将忠頼卿も耳食せりまゝ山院右大将愛徳卿園大納言基理卿
東園侍従基仲朝臣大炊御門中納言経久卿河鱈宰相実祐卿今城中
将定成朝臣三條大納言公修卿野宮左少将定業朝臣同侍従定靜朝臣
ふくも入来りして御聴聞ありまゝ日野一位資枝卿富小路新三位貞直
卿芝山中納言持豊卿園大納言殿等よりも召きて奉りし又四條の
寓して万葉集の誦説せしれりも耳食しりて

富小路殿日野中宮權大進資愛朝臣錦小路三位頼理卿外山三
位光實卿倉橋中務權少輔泰行朝臣など又祝詞の誦説の時ハ綾小
路中納言俊資卿富小路殿錦小路殿日野權大進殿源氏物語の時ハ富
小路殿外山殿日野權大進殿なども入らせりいぬ其ち芝山宮内大輔國
豊朝臣日野一位殿なども入らせり富は訪ひ来りてやをせり外も
存ありしむのしして此ハ公家のきみから多く哥をみて給ひたり
中ハ富小路殿ハ古風の長きも短きも殊よしくもみくのてなむいなり
山城のよそにうづきく伊勢の海のかはえりたかきとあそびや又馬のそ
なむけは送本居大人帰伊勢國作詩一首並短詩とて 神風の伊勢の
國なる松坂のまのひありてうちびさす都よのぼり草枕旅やどりて
かゝのまの各よむ官れふることのまのこや朝のひも夜かこらふを
梓弓音は耳つてさな竹の大官人もまづてまといやき人を明くれ日
のちかぞでたされ夜のあたるきとまづてまの膝おふせてまのばら
絶るこかく我とまて教をうけてはがの本のいやつぎくよいそのか
ふるの中をみるればあやなふとく分るはあやなふとくみは
やちあまの親と大船のおもひのそなたびまねくゆたさひよあ
らまの月も輝きておののちゆけいといふせむさふさふな
くこなれまといふれは珠のまよふてふることの二見の浦のふたび

もよきくいましてかよきくよのぼり来ませと菅の根の移もころよの樹
 々の別まの 天つ水あふだてぞまのいふまにげ二の浦の名をいたの
 してことよせたまふもその中のひとつなつなりかして大人の身よかり
 多ひたる後に何ぞの故やありけん 伊勢の海の清き清き清き清き清き清き
 十條玉をむろそむと口ききみひたるそそそそそそそそそそそそそそそそ
 このうへ千年あまのりよおまよまて大官人の古風の哥をみよふよこの
 をあへ世よハきこえきこえきこえきこえきこえきこえきこえきこえきこえ
 公家の君なられ侍會まて贈答の款をもそそそそそそそそそそそそそそそそ
 ごとと名はけしる一巻あり又此と記門人石塚龍麻呂遠江より京に参り
 あひて松坂まで送りまわせし其むくのののを記とてめて宮古日記
 とりよを大人のあてて款とて書添まひたる六月十二日松坂の宮あか
 まの〇九月十八日よりころころころころころころころころころころころ
 甲して廿九日の曉身まのりよりひぬ十月二日の秘とて定座まひつる山室山の
 嶺の墓所は葬めまのりより塚の上は橋を植て碑は本居宣長之奥墓と
 銘せり此文字ハ既ヨリトシ其墓所ハ妙楽寺の境内トシテ松坂トシテ南ののり
 二里をのりよありて此時の事どもハ門人青木茂房の書とてのりたる
 がありて歎の下露とつふよ尾張の起人加藤磯足が時雨の日記といふも
 ありて又大人の謚を秋津彦美豆櫻根大人と称し申し平常は手馴

一多ひたる橋本よて送るもの形たるものを冥牌として謚を書
 けて家よ祀り参りて又松坂なる樹敬寺といふを祖たらの墓所な
 りとれ其所よも碑を建て僧の呼ぶなる戒名まのりよの名をよのりて
 家族の常よ請るところとてこれららの事どもハの秘て言わざ終へ依
 代とむきの有しゆえなりとて

文政九丙戌年九月廿九日謹編畢

翁板ふぢとて一の如く。ねきもいぢとていぢとて。そのよ
し江戸ふ拙しとのら。信友主ふらひて。まあゝぢとてか
ら私けれど。そとぢとていぢとて。うぢいぢとて。あ
事形りぬぢとていぢとて。さふぢとていぢとて。かくぢとて。

文政十二年己丑八月二十三日

本居大平

文政十二年己丑九月

